

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實
広島平和文化センター会長

本財団新理事長に香川剛廣 元エジプト大使が就任

本年2月1日、元エジプト国駐^{ちゅうさつ}日本国特命全権大使^{かがわつけひろ}の香川剛廣氏が本財団の11代目の理事長に就任しました。



略歴 昭和32年（1957年）生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。昭和56年（1981年）外務省入省。中近東アフリカ局中近東第一課長、米国大使館参事官、在サウジアラビア大使館参事官、兼在イラク大使館（在サマワ自衛隊駐屯地、外務省リエゾンオフィス所長）、在ジュネーブ国際機関日本政府代表部公使、在中華人民共和国大使館公使、大臣官房参事官兼中東アフリカ局、地球規模課題審議官（大使）、エジプト国駐^{ちゅうさつ}日本国特命全権大使、内閣官房TPP等政府対策本部首席交渉官を経て、令和4年（2022年）11月外務省退官。

就任のあいさつ

この度、小泉 崇前理事長の後を受け、広島平和文化センター理事長に就任致しました香川剛廣と申します。被爆地広島^{こいずみたちし}の想いを原点に、その継承と世界の平和を推進するため、国内外で様々な活動を展開している平和文化センター理事長という重責を担うことは身に余る光栄であり、センターの更なる発展に全力で取り組む所存です。これまで平和文化センターを支え、育ててくださった多くの関係者の皆様の力をお借りして職務を遂行して参りますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

平和文化センターは多くの先人、関係者の皆様のご尽力のおかげで、被爆者の方々の想いを世界に伝える活動と共に、核廃絶に向けた様々な運動に取り組み、大きな成果を上げて来ました。中でも40年の歴史を有し、国連に登録された国際NGOでもある平和首長会議は、平和文化センターがその運営を担って参りましたが、今や、世界の8000以上の都市がその趣旨に賛同し、参加する大きな組織になっています。また、2021年には広島の願いでもあり、極めて大きな歴史的意義を有する核兵器禁止条約が発効しました。平和文化センターとしても平和首長会議のネットワークを活用し市民レベルでの条約の後押しの努力を行って参りました。昨年開催された条約の第一回締約国会議に関しては、松井市長と共に小泉前理事長が平和首長会議事務総長として参加し、各種イベントにも積極的に貢献されました。私も、これまでの外交官としての経験・知見を活かし、核なき平和を求めて、文化・青少年交流などの分野を始め、国際交流、協力を更に前に進め、センターの活動推進と発展に貢献していきたいと考えております。

私自身の経験を申し上げれば、40年の外交官生活の中で、如何に平和が大切であるか、そのための具体的な努力が重要であるかを実感してきました。中東地域を担当した際には、イラク戦争などの紛争後の平和構築に関わり、戦乱で荒廃した都市や市民の窮状などをつぶさに見て関連のプロジェクトの立ち上げや実施に関与し、現場での様々な調整を担いました。核の問題に関しては、イランの核開発を巡り国際社会の懸念が高まり、中東地域全体の平和と安定に大きな影響が及ぶ中、対イラン、国連外交などにも関わって来ました。

広島と核兵器廃絶の問題に関しては、駐エジプト日

目次

本財団新理事長に香川剛廣元エジプト大使が就任	①
祈念館企画展「空白の天気図」	②
資料館企画展「広島戦災児育成所」／資料館本館常設展示資料の入替	③
資料館本館「市民が描いた原爆の絵」原画の展示入替	④
第10回平和首長会議総会を開催	⑤
要請文とヒロシマビールを日本政府に提出／「平和研究と『平和文化』」(大芝亮)	⑥
「核兵器禁止条約の重要性が増している」(トーマス・ハイノツィ)	⑧

「記憶の解凍」(庭田杏珠)	⑨
国際賢人会議の委員に向けた被爆体験証言を終えて(八幡照子さん)／被爆体験記「核なき世界へ」(篠田恵)	⑩
平和文化月間に様々なイベントを開催	⑫
国際フェスタ2022／北海道3都市で国内原爆・平和展開催	⑭
ポーランドにおけるヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展／平和記念公園を英語でガイドするユースピースボランティア	⑮
広島市民じゃけえ!(デーウィカー・ウィーラシハさん)	⑯



本大使を務めていた際に、広島大学の越智^{おち}学長一行が来訪され、首都カイロ市など幾つかの都市との交流が行われ、私もその現場に立ち合うことができました。また、広島の思いとして、世界に平和を発信する使命がある、との学長のお話に大変感銘を覚えたことが思い出されます。それ以来、エジプト人の有力者、友人に広島の努力を紹介すると共に、戦乱や紛争の続く中東の国だからこそ、若い世代への平和教育が重要との考えから大学などの教育関係者に平和教育の導入を訴えました。広島大学には平和学の講座をエジプトの大学で担当していただくようお願いし、実現させることができました。私自身、エジプトから広島に2度ほど訪問し、松井市長や広島大学も訪問させていただき、その際、エジプトからの思いも込めて、慰霊碑に参拝、献花もさせていただきました。今後は、広島市立大学をはじめ他の大学や教育研究機関との連携も推進していきたいと考えています。

現下の国際情勢を見ると、昨年2月のロシアのウクライナ侵攻後、市民を巻き込んだ人道上的深刻な危機が長期化すると共に、核兵器使用のリスクが冷戦後の世界で最も高まっていると言われています。核兵器禁止条約の発効という前向きな兆しとは裏腹に、「核

兵器廃絶」を巡る状況は、一段と厳しさを増していると思わざるを得ません。核保有国による核軍縮は一向に進まず、核の拡散も深刻に懸念されています。しかしながら、「核兵器廃絶」が如何に困難であろうとも、その実現を絶対に諦めてはならないと思います。今こそ市民社会の声の結集、連帯の力が重要となっていると確信します。そして、その観点からは、広島平和文化センターの役割、平和首長会議という連帯の輪がますます重要になっています。

2021年に平和首長会議が採択した平和推進のためのビジョン（PXビジョン）においては、核兵器廃絶と共に、安全で活力のある都市の実現や、平和文化の振興を目標にしています。このような幅広い目標への取り組みには、様々な分野の専門家、関係者の方々や、市民の皆様の御支援、御協力が欠かせません。

私自身、広島の地で働くのは初めてではありますが、被爆者の方々に始め関係者の皆様に学び、広島の想いを共有しながら、全力で平和文化センターの活動に取り組んでいきたいと思っています。皆様方の温かなご理解とご協力をいただければ幸いに存じます。どうか宜しくお願い致します。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 企画展 空白の天気図 —気象台員たちのヒロシマ—

期間 令和5年3月15日(水)～令和6年2月29日(木)
場所 追悼平和祈念館地下1階 企画展示室

昭和20年(1945年)8月6日の原爆投下は、爆心地から約3.7km離れた広島地方気象台にも多大なる被害をもたらしました。その状況下でも「気象観測を担う者は、現象についての時間的な変化を絶えず記録しなければならない」と、気象台員たちは決死の覚悟で観測を続けました。また、被爆後わずか1か月で広島を襲った枕崎台風は、原爆被害を一層深刻なものにしました。台員たちはこの二重の被害を後世に伝えようと、詳細な聞き取り調査を行い、調査報告書にまとめました。

今回の企画展では、観測者の視点から記録された被爆体験記をもとに被爆の実相を明らかにします。

展示内容

(1) 大型スクリーンによる映像展示

企画展示室を全面リニューアルし、約190インチの大画面で映像作品(約30分)を鑑賞できるようになりました。

今回の映像作品ではナレーションを、俳優の岸部一徳^{きし べい いく}さんと広島出身の気象予報士、勝丸 恭子^{かつまる きょうこ}さんをお願いしています。

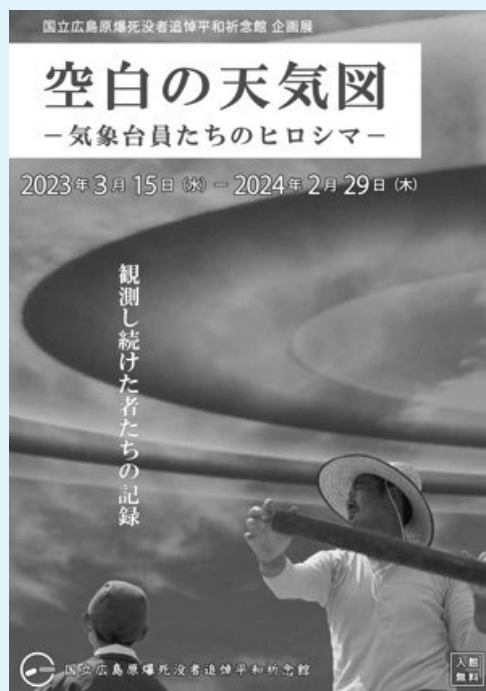
(2) 実物展示

気象台員たちの体験記(直筆)や広島市江波山^{え ば や ま}気象館所蔵の観測器等を展示します。

【お問い合わせ】

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 〒730-0811 広島市中区中島町1-6

TEL (082) 543-6271 / FAX (082) 543-6273 / URL hiro-tsuitokinenkan.go.jp



祈念館 HP

広島平和記念資料館 令和4年度第2回企画展 広島戦災児育成所 ー子どもたちと山下義信ー

期間 令和5年3月24日(金)～9月11日(月)

場所 平和記念資料館 東館 1階 企画展示室

原爆により、多くの子どもたちが家族を失いました。戦後、孤児となった子どもたちを養育する施設が相次いで設立されますが、「広島戦災児育成所」は、いち早く昭和20年(1945年)12月に広島市郊外^{さえき}の佐伯郡五日市町^{いつかいち}に開設^{やました}されました。初代所長となった山下義信(明治27年(1894年)～平成元年(1989年))は、私財を投じて施設をつくり、その運営と子どもたちの養育にたずさわりました。

その後、山下義信は広島県選出の国会議員として主に社会福祉に関する法整備に精力的に取り組みました。とりわけ戦争の犠牲となった動員学徒への補償や原爆医療法の立案に貢献しました。

今回の企画展では平成30年(2018年)に山下家よりご寄贈頂いた資料を中心に、広島戦災児育成所のあゆみと創設者である山下義信の生涯を紹介します。

(展示構成)

- 学童疎開と原爆投下
- 広島戦災児育成所と創設者山下義信
- 政治家山下義信の活動

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課／TEL (082) 241 - 4004／URL <https://hpmmuseum.jp>



資料館 HP



開設当時の広島戦災児育成所(山下義信資料(山下晃寄贈))

平和記念資料館本館 常設展示資料の入替

広島平和記念資料館の常設展示では、被爆資料や写真、被爆者が描いた原爆の絵などの実物資料を中心に被爆の実相を伝えています。

被爆資料や絵の原画は長期間展示すると劣化の恐れがあるほか、所蔵する多くの資料の活用を図るため、資料館では定期的な展示資料の入替を行っています。

今回、2月14日から16日までの期間、資料館を臨時休館し、本館常設展示の「8月6日の惨状」、「放射線による被害」、「魂の叫び」の3つのコーナーの被爆資料60点、「市民が描いた原爆の絵」の原画6点を入れ替え、2月17日から公開しました。

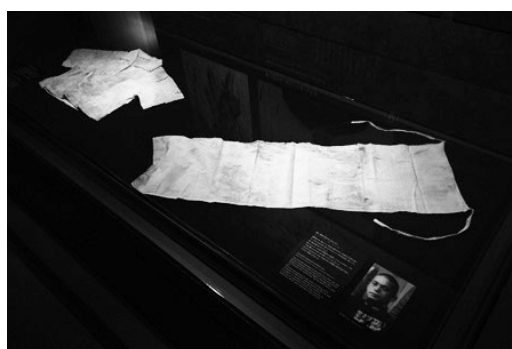
「8月6日の惨状」コーナーのうち、「亡くなった生徒たち」の大型ケースには、建物疎開作業に動員され被爆した生徒たちが当日身につけていた衣服や携行品を22人分、34点展示しています。

写真左下に写る上着・ズボン・布靴は、県立広島第二中学校1年生だった堀尾英治さん(当時13歳)が当日身につけていたものです。英治さんは爆心地から600m^{なかしましんまち}の中島新町の建物疎開作業現場で被爆し、大火傷を負い川に浸かっていたところを助けられました。知らせを受けた母親がリヤカーに乗せて自宅に連れて帰りましたが、8月10日に亡くなりました。



「8月6日の惨状 亡くなった生徒たち」

同コーナーの「黒い雨」及び「救護所の惨状」の展示ケースには、それぞれ黒い雨の染みが残ったふんどしと体操シャツ、救護所で亡くなった女性が当日着ていたワンピースを展示しています。



「8月6日の惨状 黒い雨」(左)松宮豊子寄贈、(右)堀江柊子寄贈



「8月6日の惨状 救護所の惨状」(飯島憲章・飯島俊任寄贈)

被爆して亡くなった方の遺品を説明文や遺影とともに展示する「魂の叫び」コーナーでは、17人分、22点の遺品を入れ替えました。

南側のケースで展示している印鑑と眼鏡は、かばん店を営んでいた平柿保さん(当時52歳)の遺品です。保さんは爆心地から500m離れた塚本町の同業者の組合事務所で被爆しました。妻のアヤノさんが翌日から市内を捜索し、8月25日に事務所の焼け跡でこの印鑑と眼鏡を発見しました。



「魂の叫び」印鑑と眼鏡 平柿アヤノ寄贈

北側のケースで展示している夏服は、爆心地から800mの土橋付近の建物疎開作業現場で被爆した、県立広島第一高等女学校1年生の^{おおしたのぶこ}大下靖子さん(当時13歳)が当日着ていたものです。靖子さんは被爆後収容されていた救護所から自宅のある^{さえき おおたけちよう}佐伯郡大竹町まで運ばれ、両親と再会しましたが、その日のうちに亡くなりました。この夏服は、靖子さんが母親の着物をほどこいて自分で縫ったものです。



「魂の叫び」自分で縫った夏服 ^{さだお}大下定雄寄贈

今後も、「8月6日の惨状」、「放射線による被害」、「魂の叫び」の被爆資料は1年ごと、「市民が描いた原爆の絵」の原画は半年ごとに入替を行う予定です。

(平和記念資料館 学芸課)

平和記念資料館本館「市民が描いた原爆の絵」の原画の展示入替

広島平和記念資料館では約5,000枚の「市民が描いた原爆の絵」を所蔵しています。資料館本館「絵筆に込めて」のコーナーでは、その原画を展示しており、展示による劣化を防ぎ長期的に保存していくため、半年ごとにテーマを決めて入れ替えを行っています。今回は、全焼全壊地域(爆心地から2km以内)をわずかに外れた^{みゆきばし}御幸橋の、被爆当日を描いた絵を展示しています。

①の絵には、猛火の広島市街地から御幸橋を渡って避難する人の様子が描かれており、絵の中に作者の^{まつしまけいじろう}松島圭次郎さん自身も描かれています。



① 御幸橋を渡って避難する。
(昭和20年(1945年)8月6日／松島圭次郎作)

②の絵は8月6日午後6時ごろの様子を描いたもので、道路や京橋川水面に見える人や馬の死体や、夕方になっても赤く燃えている広島市街地が描かれています。どちらの絵にも、全身が焼け、前に突き出した手から皮膚が垂れ下がっている姿が描かれています。



② 御幸橋東詰から西に向けての惨状
(昭和20年(1945年)8月6日／岡田佐美子作)

これらの絵を含めた6点を、令和5年9月まで展示する予定です。
(平和記念資料館 学芸課)

第10回平和首長会議総会を開催

平和首長会議は、昨年10月19日（水）、20日（木）の2日間、「核兵器のない平和な未来を創造するために～市民社会に『平和文化』を根付かせよう～」を基調テーマとして、第10回となる総会を広島市で開催しました。

開会行事

平和首長会議設立からの40年の歩みを振り返る記念動画を上映した後、松井一實会長（広島市長）は、開会挨拶において、核兵器のない平和な世界の実現に向けて為政者の政策転換を促すため、「平和文化」を市民社会に根付かせることに一層注力するとともに、G7広島サミットを追い風にしたいと述べました。



松井会長による開会挨拶

また、アントニオ・グテーレス国連事務総長はビデオメッセージで、核兵器使用のリスクが高まっているが諦めてはならないと呼び掛けました。

被爆体験講話

14歳で被爆した梶本淑子さんは、一人でも多くの人に被爆の実相を伝えることが生き残った私の務めだと語り、平和を求める多くの人の力と亡くなった人の魂によって必ず核兵器は廃絶できると確信していると訴えました。

広島の子どもたち 平和創作劇 I PRAY

広島の子どもたちが、原爆が投下される前の広島、原爆が投下された時の広島、復興後の広島を演じ、平和の尊さを訴えました。

会議Ⅰ

松井会長が議長を務め、「平和首長会議サポーター制度」の創設などの議案を審議し、原案どおり議決されました。

「平和首長会議サポーター制度」は、SNSを使って若い世代に重点的にアプローチし、平和首長会議の理念や取組に賛同する個人や団体（サポーター）を増やすことにより、為政者の政策転換を促す市民社会の総意形成に向けた環境づくりを行うものです。

会議Ⅱ

本財団のトーマス・ハイノツィ専門委員がモデレー

ターを務め、「加盟都市の役割」をテーマに、スペイン・グラナダ市のアルバ・バルヌセル市長、カナダ・モントリオール市のアリア・アッサン・クルノル市議会議員、ドイツ・ハノーバー市のベリット・オーナイ市長、東京都国立市の永見理夫市長が活動事例を発表し、核兵器のない平和な未来を創造するために都市が貢献できることについて考えました。

記念講演

「平和の文化」の提唱者であるアンワルル・チョウドリー元国連事務次長が、「より良い世界の創造に向けた地域社会に根差した『平和の文化』の振興」と題して講演し、平和とは差別や偏見などがないことであり、都市こそが人類の未来と持続可能な発展に貢献できるとし、人類のため、持続可能な地球のため、住みよい世界のため、「平和の文化」を振興しましょうと呼び掛けました。



チョウドリー元国連事務次長による記念講演

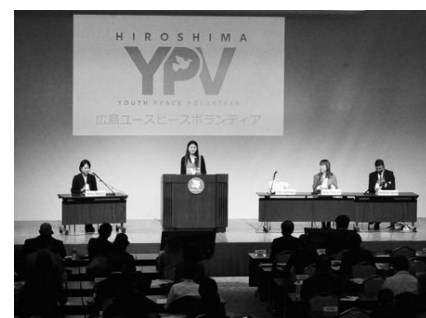
パネルディスカッション

小泉 崇 事務総長（本財団前理事長）がモデレーターを務め、「平和文化をより強く地域に根付かせるために」をテーマに、チョウドリー元国連事務次長、松井会長、田上富久副会長（長崎市長）がパネルディスカッションを行いました。

松井会長は、自団体の外にも共感能力を発揮することで、他団体とも友好関係を保てると述べました。また、田上副会長は、考え方をOSに、自分たちで平和をつくることをアプリに例え、古いOSを書き換えてアプリが動作するようにしていかなければならないと述べました。そして、チョウドリー元国連事務次長は、国連からジェンダー平等に取り組み、女性の国連事務総長が選ばれるようにならなければならないと述べました。

会議Ⅲ

まず、来賓の武井 俊輔外務副大臣が挨拶し、核軍縮の機運を高めるため、平和首長会議との連携を深めたいと述べました。



事例発表の様子

そして、被爆体験伝承者の名原志穂さんがモデレーターを務め、「被爆者の思いを受け継ぐ青少年の役割」をテーマに、ユースピースボランティアの末永琳子さん、KNOW NUKES TOKYOの中村涼香共同代表、ポルトガル・エヴォラ市のアルシャンドル・ヴァレラ副市長が事例を発表し、次代の平和活動を担う青少年の育成について考えました。

会議Ⅳ（第10回平和首長会議国内加盟都市会議総会）

松井会長が議長を務め、来年度の国内加盟都市会議総会の開催地市長である清元秀泰兵庫県姫路市長の挨拶の後、日本政府に対して核兵器廃絶に向けた取組の推進を求める要請文などについて審議し、原案どおり採択されました。

閉会行事

平和首長会議が若者の育成などを通じて「平和文化」

核兵器廃絶に向けた取組の推進を求める要請文とヒロシマアピールを日本政府に提出

昨年12月13日（火）、平和首長会議会長の松井広島市長と副会長の田上長崎市長が首相官邸を訪問し、第10回平和首長会議国内加盟都市会議総会で採択した日本政府に核兵器廃絶に向けた取組の推進を求める要請文と、第10回平和首長会議総会で採択したヒロシマアピールを岸田文雄内閣総理大臣へ提出しました。

これに対し、岸田総理は、「核兵器禁止条約は、核兵器のない世界という目標の出口に当たる重要な条約であり、核兵器国をいかに近づけるかが大きなポイントになると思っている。多くの方々がオブザーバー参加や署名・批准を求めていることはしっかり受け止めたいと思うが、どう向き合っていくのか、まずは米国との信頼関係を作る中で考えていきたい。」と述べられました。

（平和首長会議運営課）



左から、松井広島市長、岸田内閣総理大臣、田上長崎市長
（写真提供：内閣広報室）

を市民社会に深く根付かせることに一層注力していくことや、核兵器使用のリスクを低減させるために国連・各国政府に求める六つの方策などを盛り込んだ、「ヒロシマアピール～平和首長会議設立40周年を記念して～」を松井会長が読み上げ、原案どおり採択されました。

最後に、田上副会長が挨拶し、PXビジョンの

方向性を共有しながら、核兵器のない平和な世界の実現に向けて共に進み、2025年に長崎市での開催となる次の総会で良い報告ができることを願っていると述べ、この度の総会は閉会しました。

なお、ヒロシマアピールは、昨年11月上旬に国連事務総長や各国政府の国連代表部に送付しました。詳しくは、以下の平和首長会議ホームページでご覧いただけます。

（URL）<https://www.mayorsforpeace.org/ja/new/2022/post-221102/>

（平和首長会議運営課）



平和首長会議 HP

“平和について思う” 平和研究と「平和文化」



大芝 亮

広島市立大学広島平和研究所長・
特任教授、本財団理事

1. はじめに

広島市はその都市像として「国際平和文化都市」を掲げ、1976年に広島平和文化センターを設立しました。同センターは毎年11月に平和文化月間として講演や行事を実施しています。

このように「平和文化」ということばは私たちにとりなじみのあるものですが、いざ「平和文化」とは何かと問われると、答えるのは必ずしも容易ではありません。そこで「平和文化」ということばの意味やそこに込められている意味合いについて考えたいと思います。

2. 平和宣言における「平和文化」

まず広島市と長崎市の2022年平和宣言において、このことばがどのように使われているかを見ておきます。

まつい かずみ
松井一實・広島市長は、平和首長会議は「平和を願う加盟都市との連携を強化し、あらゆる暴力を否定する『平和文化』を振興します」と述べています。田上 富久・長崎市長は「信頼を広め、他者を尊重し、話し合いで解決しようとする“平和の文化”を、市民社会の中にたゆむことなく根づかせていきましょう」と言います。

3. 平和研究における暴力と平和

次に平和研究での議論を参考に、「平和文化」について考えてみます。平和研究の代表的な研究者であるヨハン・ガルトゥングは、平和を暴力と対置させ、直接的暴力、構造的暴力、文化的暴力という3つのタイプの暴力を提示します。

簡単に述べますと、直接的暴力とは、相手の身体に直接に危害を加えたり、戦争において軍隊が敵の兵士を殺傷したりすることなどです。これに対して、誰が暴力を振るっているのか、暴力行為の主体は見えにくいけれども、人々、特に特定のグループの人々が生命を失ったり、大きな心的ダメージを受けたりする場合、そこに構造的暴力が存在するといえます。たとえば多くの人々が貧困のために十分な医療を受けることができず、本来助かるはずの命を落とすというような状況が見られるような場合です。また、100万人の夫が100万人の妻を殴るならばそれは直接的暴力ですが、100万人の夫が100万人の妻を無知・無学の状態に留めるならば、それは構造的暴力であると言ったりします。最後に、文化的暴力とは、直接的暴力や構造的暴力を社会の道徳や伝統・慣習などにより許容し、正当化する考え方などを意味します。

このような暴力を否定し、取り除き、暴力が不在となってはじめて平和であると考えます。直接的暴力が不在となった状況を直接的平和と呼び、構造的暴力のない世界を構造的平和、文化的暴力が不在で、直接的平和と構造的平和を正当化する状況を文化的平和と言います。そして、文化的平和と呼べる状況が私たちの社会に広がり、これが私たちの文化の特徴であるといえるようになると、そのような文化は「平和文化」と呼ぶことができます。ただし、「平和文化」を強制的に押しつけることはやはり暴力です。

具体的な事象についてととなると、直接的暴力は捉えやすいのに対して、構造的暴力や文化的暴力については、何がそれらに相当するのか、いつもコンセンサスが得られるとは限りません。

4. 被爆地における「平和文化」への取り組み

さて、被爆地では、「平和文化」についていかなる取り組みがなされてきたのでしょうか。

原爆で被害を受けた人々はさまざまなタイプの暴力に遭遇してきました。原爆は人間の尊厳を徹底的に破壊するものでした。放射線影響の不安やこれに関連す



〈ふたりの被爆画学生〉展
(2022年5月～7月 於：平山郁夫美術館)(*無言館所蔵)

る差別にも苦しめられました。戦争を早く終わらせるために原爆は投下されたとして、これを正当化しようとする議論は怒りと悲しみをもたらしました。

それでも、原爆で亡くなった人々の死を無駄にしないために、また核兵器が繰り返し使用されないように、原爆で被害を受けた人々は被爆体験・記憶を伝え、核兵器の非人道性を訴え、核兵器廃絶を求めてきました。そして、日本の戦争責任の問題にも言及し、原爆で被害を受けた、日本人以外の人々にも目を向けるようになりました。抽象化していえば、直接的暴力だけでなく、構造的暴力および文化的暴力をも取り除こうとしてきました。こうした取り組みの一つ一つが「平和文化」をつくり、根付かせるのだと思います。

ただし、これまでの取り組みについて、被爆地にある人々の自己イメージと、外国や国内の他地域の人々の捉え方との間に、どのようなズレが存在するのか、またそれはなぜかを自問していくことは重要です。

5. おわりに

今もウクライナでは戦争が行われています。また東日本大震災および福島原発事故により、さまざまな暴力にさらされてきた人々は少なくありません。被爆地において、原爆で被害を受けた人々を中心に組みこんできた活動を伝えることで、こうした人々を勇気づけることができます。

これからは地域や国そしてイシューを超えた連帯がますます重要になります。平和首長会議や国連等を通じて内外の人々と連帯し、また核兵器廃絶をめざすことはもとより、他のイシューでのさまざまな暴力の除去にも努めることが、「平和文化」を押しつけることなく、根づかせることにつながると考えます。

プロフィール

〔おしば りょう〕

広島市立大学広島平和研究所長・特任教授。専門：国際政治学。一橋大学教授・副学長、青山学院大学教授を経て、2019年より現職。元日本国際政治学会理事長。



核兵器禁止条約の重要性が増している（翻訳版）

トーマス・ハイノツィ

本財団専門委員

2022年は、世界に対して、核抑止が立脚している神話は真実ではないと警鐘を鳴らした年になりました。ロシアがウクライナに仕掛けた戦争は、核兵器が戦争の抑止力として機能しないことを証明しただけでなく、反対に戦争を勃発させる可能性を高めるという証明にもなりました。プーチン大統領は、核兵器は他の大国がウクライナを支援するために参戦するのを阻止するであろうから、非核保有国との戦争を開始するための一種のフリーチケットになるともくろみました。核保有国が恐ろしい危険をもたらす核兵器を保有しているからこそ、彼らが侵略戦争を始めるのを思い留まらせることができるのだと広く支持されていた想定は、現実のこの試練を乗り越えることができませんでした。核兵器はロシアの指導者が核兵器の使用をちらつかせているような戦争から私たちを救わないことが証明されました。明らかに、国際安全保障と世界の安定は人類の生存に最大の危険をもたらす核兵器に依存することはできないのです。

最近増大した「ロシアの脅威」は、ヨーロッパと東アジアの両方において、防衛費の増加と同盟の強化につながりました。悲しいことに、一部の同盟国ではより強力な核リンクを追求する動きが高まっています。ウクライナにおけるロシアの核の脅威に対する米国の反応を慎重に評価してみると、米国政府が核兵器を使用したくないと望んでいることが伺えました。おそらく合理的な指導者は、核兵器によって攻撃された同盟国を守ることはないでしょう。彼らは他の国のために何百万人もの自国民の命を犠牲にすることを望まないでしょう。

米国の上級司令官による卓上議論は、たった1つの核兵器の爆発が私たちの文明を消滅させ得る本格的な核攻撃を引き起こす可能性が高いことを示しています。核保有5か国自身が2022年1月に「核戦争に勝つことはできず、決して戦ってはならない」と表明しました。核兵器の使用は言わば集団自殺を引き起こすのです。したがって、それらは信頼できる安全保障政策の選択肢と見なすことはできず、核保有国やその同盟国に安全を保障するための現実的な手段とも見なせません。

昨年12月、プーチン大統領は、自身が核兵器使用をほめかしたにもかかわらず、ウクライナとの侵略戦争で核兵器を使用する意図を否定し、「私たちは正気

を失っているわけではない」と強調しました。確かに、核兵器を使用することはまったくの狂気であるという点では、彼は正しかったです。しかし、最近、核保有国の為政者の非理性的な行動を目の当たりにしているので、彼らが死をもたらす過ちを犯さないと信じることができるのでしょうか。核兵器が存在する限り、意図的にでも、事故や誤解による意図しないものであっても爆発する可能性があります。明日にも、広島と長崎にもたらした壊滅的で非人道的な結末をはるかにしのぐ大規模な惨禍を追体験することもあり得るのです。1945年以来、核兵器はより致命的で、より強力なものとなり、その数も何倍も多くなっており、現在約12,700発に上ります。したがって、核兵器がもたらす重大な危機から人類を救う唯一の方法は、私たちに死をもたらす前に核兵器を終わらせることです。

核兵器の廃絶は世界という共同体の目標ですが、核保有国は必要な措置をとっていません。したがって、非核保有国は、2016年に最も代表的な国際機関である国連の総会において、核兵器を禁止するための法的拘束力を有する規範を制定するための交渉開始を求めました。そして、それは圧倒的多数によって決定されました。残念なことに、核保有国とその同盟国のほとんどすべてがこの交渉をボイコットしました。矛盾していますが、彼らは、法的禁止が化学兵器、生物兵器など他の大量破壊兵器の廃絶の動きにつながったことを認めている一方で、なぜそれが核兵器では機能しないのかを説明できていません。2017年7月に121カ国が核兵器禁止条約（TPNW）の条文を採択し、この強力な規範が生まれました。

2023年1月の時点で、92か国がこの条約に署名し、68か国が批准しており、今年中にさらに多くの国が条約に参加する準備をしています。条約参加国の数は、2021年1月の発効以来、増え続けています。この条約の重要性は、2022年6月に、ウィーンで第1回締約国会議が成功裏に開催され、更に明白になりました。会議で採択された宣言では、明言かほめかしかを問わず、状況に関係なく、あらゆる核の脅威を明確に非難し、核兵器使用のいかなる脅威も受け入れられないことを知らしめました。これは、これまでのところ、グローバルな多国間会議によってロシアの核の脅威に対して発せられた最も強い非難となっています。また、条約の運用に関して、例えば科学諮問委員会の創設など多くの重要な決定がなされました。それにより、市民社会と科学者が重要な役割を果たすことを可能にして、実際に果たしていくことを示しています。驚くべきことに、他の核軍縮の会議では、彼らの知識にはほとんど注意が向けられてきませんでした。この条約の進展を裏付ける会期間の作業プログラムも決定されました。非公式作業部会は、被害者支援、環境修復、国際協力と支援、普遍化のほか、核兵器の破壊を監督する権限を有する国際当局の指定作業を担当しています。2023年11月には、ニューヨークで第2回締約国会議が開催

されます。

核兵器禁止条約と成功裏に終わった第1回締約国会議の成果は、それに反対し、依然として核兵器にしがみついている国を含むすべての国に影響を与えています。核兵器は禁止されているという条約の根底にある重要なメッセージは、核兵器に関する国際的な言説を変えました。NATOの事務総長でさえ、昨年秋、「核兵器の使用は絶対に受け入れられない」と述べ、ドイツのショルツ首相の演説にも反映されました。2022年11月にインドネシアで開かれ、核保有国の多くの首脳と日本の総理大臣が参加したG20サミットは、核兵器の威嚇と使用は「容認できない」と宣言しました。

ウクライナでの戦争は非人道的大惨事であり、隣国に対する武力国家の侵略が過去の問題となるだろうという私たちの希望を打ち砕きました。ロシアによる核兵器使用の脅威は、核兵器が存在する限り、それは使用可能であり、人類の生存に最大の危機をもたらすものだということを国際社会に痛感させました。

終末時計は、核戦争までわずか90秒であるとして、人類の滅亡を指す真夜中にこれまでで最も近づきました。この絶望的な状況の中で、私たちは核兵器という目の前にぶら下がる剣と共に今後も生きていきたいのか？と自問自答してみます。明らかに大多数の人々のように、この質問にノーと答えるならば、核兵器禁止条約に基づく核兵器廃絶こそが進むべき道です。核兵器禁止条約は、淡い希望を提供するだけではなく、人類が核兵器によって人質にされている世界に代わる世界への鍵を提供し、核兵器のない国際安全保障への扉を開きます。条約運用作業が進行している中で、この条約に対する国際的な支持と認識が高まっており、重要性を増しています。これまで以上に必要とされているのです。



「記憶の解凍」 ～戦争体験者の「想い・記憶」 を未来へ継承するために～

庭田 杏珠

東京大学教育学部3年

「記憶の解凍」

私は被爆国・日本、そして広島に生まれ育ちました。高校時代から、原爆投下前の日常を捉えた白黒写真を、AI技術でカラー化し、資料や対話をもとに「記憶の色」をよみがえらせ、戦争体験者の「想い・記憶」を未来へ継承する「記憶の解凍」に取り組んでいます。大学でも、アートやテクノロジーを通した「平和教育の教育空間」を探究しています。

きっかけは2017年夏、広島の平和記念公園で平和首長会議の核兵器廃絶を求める街頭署名活動をしていた

際、濱井徳三さんと偶然出会ったことです。生家は、原爆投下前は約4400人の暮らす広島一の繁華街・中島地区（現在の平和記念公園）で「濱井理髪館」を営んでいました。しかしあの日、濱井さんは疎開して無事でしたが、たった一発の原爆で一瞬にして愛する家族全員を失いました。片瀬須直監督のアニメ映画「この世界の片隅に」の中で「生きている」家族に会うため、何度も映画館に足を運んでいると伺いました。「カラー化した写真をアルバムにしてプレゼントして、ご家族をいつも近くに感じてほしい」との想いで取り組み始めました。

カラー化した写真をご覧になった濱井さんは、「みんな生きとるみたい」「まるで昨日のここのように思い出す」と喜ばれました。写真①は、1935年に撮影された、桜の名所・長寿園で家族や親戚、近所の方とお花見している写真です。



写真①（提供：濱井徳三）

カラー化された青々とした杉並木を見て、「杉鉄砲の玉にする杉の実を取りに行きよった」「近くに弾薬庫があり幼心に怖かった」など、白黒写真を見ていた時には思い出せなかった記憶がよみがえりました。また、桜の花や着物の色など、濱井さんの「記憶の色」をもとに色補正を繰り返します。

戦争体験者の心に寄り添い、鎮魂の想いを込めてカラー化することで、喜んでいただけることが原動力になっています。

国境を越える「記憶の解凍」

その後も、中島地区出身の方などに写真を提供していただき取り組み続けています。戦争や平和について関心のない人にも「自分ごと」として想像してもらえるように、これまで映像や展覧会、国際会議での発表、「記憶の解凍」ARアプリの開発、カラー化写真集『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』（光文社新書）の出版、初めて作詞とコーラスに挑戦した楽曲「Color of Memory ～記憶の色～」の共同制作など行なってきました。

中でも、2019年4月平和首長会議高校生代表団の一員として外務省「ユース非核特使」の委嘱を受けて参加したNPT運用検討会議第3回準備委員会の派遣事業は、人道的平和と国家の安全保障の合理性について考える機会となりました。このことは、昨年3月の岸田首相との車座対話、12月の国際賢人会議を前に行われた委員と「ユース非核特使」経験者との意見交換会でも感じたことです。

委員から「昨今のロシア・ウクライナ情勢で国際社会では『安全保障』について議論されがちだが、市民社会の『平和』の大切さを忘れてはならない」とお話がありました。市民社会の「平和」への関心を高めるとともに、国際社会でも発信する私の使命を改めて認識しました。

G7広島サミット開催～世界への期待～

大学のイベントでラーム・エマニュエル駐日米大使とお会いし、また意見交換会後も「記憶の解凍」の取り組みを紹介し、アートで「心に響く」平和の伝え方に共感いただけました。直接対話することで、心と心が通じ合えると感じます。

G7広島サミットで各国の首脳が平和公園を訪れ、核兵器の脅威はもちろん、かつてそこにあった中島地区の日常を五感で想像することで、「もう誰にも同じ思いをさせてはならない」と平和を希求する被爆者の「想い・記憶」を「おのずから伝えたい」と思う来広になることを願っています。私はこれからも様々な表現の幅を拡げながら、ライフワークとして「記憶の解凍」に取り組み続けます。

プロフィール

〔にわた あんじゅ〕

2001年広島県生まれ。東京大学学生。高校時代から「記憶の解凍」に取り組む。令和2年度「東京大学総長賞」、共著『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』（光文社、2020）で「広島本大賞」受賞。

被爆体験記

核なき世界へ



篠田 恵

本財団被爆体験証言者

昭和20年8月6日

私は女学校2年生（13歳）だった。その日私は、比治山の下^{ひやま}の鶴見橋^{つるみばし}付近の建物疎開の作業に行く予定だったが、連日の作業の疲れが出て、休んでいた。そこへ隣のおばさんが石臼^{いしうす}を借りに来られた。弟はすつくと立ちあがり、「おばちゃんも食べんちゃい」と煎り豆の入った茶碗^{ちやわん}を差し出した。

その瞬間、ヴァーンという音と共に大きな炎が家の奥まで入ってきた。私のそばの障子^{しょうじ}がメラメラと燃え上がった。私は「水」と思って立ち上がりかけた。その瞬間、足元の畳がずり落ちて、私も床下に落ち、頭を抱えた。後から来た爆風で、ありとあらゆるものが吹き飛ばされた。屋根には1メートルくらいの穴が開き、柱が残っているだけ。家の南側^{みなみ}に干してあった布団は、物干し竿ごと折れて3つの部屋を通過し、炊事場まで飛ばされていた。母は顔と手足、弟は茶碗を差し出していた手を大火傷した。

もうこの家にはいられないと、私は火傷した二人を運ぶために、母の伯母^{だいはちくろま}のところへ大八車を借りに家を

国際賢人会議の委員に向けた被爆体験証言を終えて

八幡 照子

本財団被爆体験証言者



私は2013年、国際NGOピースボートが催す「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」に参加しました。船内や寄港地で、この時は日本語で被爆体験を話したのですが、原爆の^{よみがえ}てつもない破壊力や、五感に甦る凄惨な現場、悲しみを、直接、自分の声や言葉で伝えたいと強く思いました。また、サーロー節子さんの被爆体験証言を聴き、英語での証言は世界の多くの人に通じると、英語を学ぶ決意をしました。広島平和記念資料館からYMCAに学ぶ機会をいただき、日本語の原稿を翻訳していただいたものに辞書を見ながら発音記号を入れ、先生の吹き込んで下さったテープを聴いてイントネーションを学びました。その後、カルチャースクールに通い、20分の英語の被爆体験証言を丸暗記し、先生やクラスメートの応援をいただいて磨いてきました。

そして昨年12月10日、広島で開かれた国際賢人会議の委員に向け、証言を行なうこととなりました。諸先輩もいらっしゃる中でいただいた重責に、身の引き締まる思いで臨みました。皆さまには、「母国語の英語で初めて被爆体験を聴き、心揺さぶられた」「心に沁みました」と言っていただきました。

グテーレス国連事務総長は昨年広島で、「核兵器保有国が核戦争の可能性を認めることは、断じて許容できない」と言いました。ウクライナ危機を巡り、核兵器がもたらす危険についても、一人ひとりが声を上げ、世界を変えていかなければならないと思います。巨大なリスクが内在している核兵器に依存しない選択を、政治指導者の意志と専門家の分析力を組み合わせて、時代の流れを見つめながら、若い人達の未来やその子孫のために、国内外に発信していただきたいと思います。

若い人達には、「地球と人類の安全保障」について当事者となって感じる心と感性を期待しています。

出た。

近所の家々もかなりの被害を受けている様子だった。伯母に事情を話すと、大八車を土手まで押し上げて「早く連れておいで」と言って下さった。

田んぼの中の一本道を帰っていると、向こうの方から黒い帯のようなものが来る。近寄ってみると、髪はぐしゃぐしゃ、顔は赤黒く、両手は胸のあたりで前に伸ばし、指先に何かぶら下がっている。服はボロボロ、まるでおばけのよう。そんな人が何十人何百人も私の方に向かって来る。私は地獄に迷い込んだのだろうか。怖くて怖くて、下を向いて自分の足先を見ながら、一步一步我が家へ向かった。家についたころには薄暗くなっていた。



被爆して市外へ逃れていく人々
(作 新宮あきな)

三菱に勤務していた姉は無事との知らせがあり、学徒動員で山の中の工場にいた姉は無事に帰ってきたが、爆心地に一番近い左官町の信用組合（現在の広島信用金庫）に勤めていた幸代姉さんが帰って来ない。

陸軍被服支廠で働いていた父は、夜中に帰宅した。「幸代姉さんがまだ」と言うのが精一杯だった。父は察していたのか、目が涙で光っていた。

姉を捜しに市内へ

明けて7日、姉の勤務先の本店が横川にあり「そこまで帰っているかもしれない」と、父と二人で姉を捜しに市内へ向かった。焼けたドアをギギーと開けると、そこはまた地獄だった。赤く膨れ上がってうつろな目をして転がっている人たちが、人の気配を感じると「お母さん～、水ちょうだい～」と繰り返す。私はその場に立ち尽くし、一歩も入ることができなかった。父は姉を捜してまわったが、そこには姉はいなかった。

電車道を南下して十日市へ。ここでは電車が丸焼けになっており、中には一人、座ったままで亡くなっていた。爆心地近くの相生橋の方へ眼をやると、性別もわからない真っ黒い死体がゴロゴロしている。皮のゲートルで兵隊さんとわかる死体もあった。馬も三頭死んでおり、お腹が割れて黄色い臓物が出ていた。

姉が勤める信用組合の前で手を合わせ、「神様仏様どうか姉を守ってやってください」と祈った。

相生橋手前を、川土手を通って家の方へ戻ると、私の母校である大芝小学校に、避難した人が大勢集まっていた。自宅近くまで戻ると、大八車の方から「世羅（私の旧姓）さんでしょう」とか細い声が何度も呼ぶ。覗いてみても、赤くはれて人相が全く変わってい

て、誰かわからなかった。大八車を引く人から、クラスメイトの岡田さんとわかった。私は無傷。建物疎開作業に行っていたら、私もこのようになったか、死んでいただであろうと思うと、声をかけてあげることもできなかった。

岡田さんは今どうしているだろう。私は死ぬまで忘れることができない。この日は姉を見つけることはできなかった。

姉を捜さなければと思ったが、とりあえず壊れた我が家を片付けて、そこに寝ることになった。畳の上で寝られるのは、とてもうれしかった。

その日から、母は柱に寄りすがって姉の帰りを夜な夜な待ち続けた。

今も続く不安

昭和20年8月15日、天皇陛下の玉音放送で敗戦を知った。敗戦を予見していた父の言葉は本当だったなあと考えた。

戦後、従兄と兄が元気で復員してきた。

弟晴樹の包帯も9月半ばには取れたが、原爆症の一つである下痢が10月頃始まった。「おいもはいらん」「かぼちゃは食べん」と言い、母を困らせた。病気の子供に食べさせてやるものもなく、母もどんなにかつらかったであろう。隠れてそっと涙を拭いていた姿を今も忘れることができない。弟は骸骨のようになって、母の胸にしっかり抱かれ、10月22日に姉のもとへいった。

数年後、父は肝臓癌、母は胃癌、長姉は肺癌、兄と従兄は焼け跡の灰を掘り起こしたためか、二人ともが白血病で死亡した。私は健診で脾臓癌が発覚。78歳の時に大手術をした。戦後78年経った現在でも、被爆者は不安を抱えて生きている。

伝えたいこと

戦争は悪。今世界中に核爆弾がおよそ一万三千発あると言われている。広島に投下された「リトルボーイ」の何十倍、何百倍の威力があると言われている。こんなものを使用すると、地球は破滅するだろう。21世紀こそ戦争のない、核兵器のない平和な世界になるよう、一人でも多くの人に語っていこうと思う。

結びに、倫理学者で原水禁運動家の森瀧市郎氏と、高校の恩師である被爆者の沼田鈴子氏の言葉を伝えたい。

「核と人類は共存できない。」

「憎しみの心の中から平和は生れない。」

プロフィール

〔しのだ めぐみ〕

昭和7年3月生まれ。旧姓、世羅。女学校2年生13歳の時、爆心地から2.8kmの自宅で被爆し、体調をくずし退学。後に、安田学園高等学校を卒業した。2017年より、広島平和文化センターより委嘱を受け、被爆体験証言者として活動している。

平和文化月間に様々なイベントを開催しました！

広島市が「平和文化月間」と定めた11月には、平和への思いの共有につながる「文化」を振興する様々なイベントが開催されました。今年度は、広島広域都市圏にも取組の輪を広げ、イベントを巡ることで地域の名産品などが当たるデジタルスタンプラリーも実施しました。期間中の様々なイベントに多くの方が参加され、芸術文化活動やスポーツなどを通して、改めて平和について考えていただくことができました。

ここでは本財団が主催したイベントを御紹介します。

平和文化講演会【10/29（土）】

平和文化月間オープニングイベントとして、俳優の紺野美沙子さんをお迎えして平和文化講演会を開催しました。俳優としてテレビ、映画、舞台で活躍され、バラエティ番組にも度々出演し、飾らないトークで人気の紺野さんは、1998年から



講演する紺野美沙子さん

国連開発計画（UNDP）親善大使としてカンボジア、パレスチナのほか、アジア・アフリカの各国を視察するなど、国際協力の分野でも活動されています。

この度の講演会では、「UNDP親善大使として見たこと感じたこと」をテーマに、貧困や困難があっても前向きに生きる人たちの様子などについてお話しくだくとともに、2010年から主宰されている「紺野美沙子の朗読座」の新作である、広島原爆でわが子を亡くした父母らの手記「星は見ている」の朗読を小川典監督によるオリジナル映像とともに上演いただきました。

来場者からは、「発展途上国の現状を知り、真の幸せについて考えさせられた」「自分にできることを何かすることが大切だと感じた」「感情豊かな朗読と美しい映像に感動した」などの感想が寄せられました。特に、原爆でわが子を亡くした父母らの思いを込めた朗読は多くの方の胸に響き、会場は平和への思いに包まれ、来場者にとって、それぞれが改めて日常の中の平和について考える機会となりました。

市民平和文化イベント【11/3（木・祝）】

広島国際会議場の大会議室ダリアで「令和5年度市民平和文化イベント ～ヒロシマの思いをつなごう 文化の日～」を開催しました。広島で平和活動に取り組む若い世代を中心とした団体が、ステージ発表や展示発表を行い、日頃の活動や平和への思いを発信しました。

オープニングでは、松井一實^{まつい かずみ}広島市長から「本日のような音楽や演劇などの芸術文化活動や、平和に関する展示発表を通じて「平和文化」を根付かせていきたいと考えており、このように多くの市民の皆様^{うれ}に御参加いただいていることをたいへん嬉しく思います」との挨拶がありました。

<ステージ発表>

ステージ発表では、若い世代を中心とした5団体が、平和への思いが込められた楽曲の演奏や合唱、打楽器のアンサンブルのコンサート、被服^{しきふ}支^し廠^{しょう}を舞台とした紙芝居、平和創作劇の上演を行いました。平和をテーマにしたこれらの発表は、多くの来場者への共感を集め、平和の大切さや尊さを共有する機会となりました。



ヒロシマ・ヤング・ピース・ビルダーズによる発表の様子

【発表団体】

- ・ジュニアウインドオーケストラ広島
- ・ヒロシマ・ヤング・ピース・ビルダーズ
- ・千田パンフルート合唱隊
- ・長束プラスアンサンブル
- ・平和創作劇 I P R A Y

<展示発表>

展示発表の会場では、高校生や大学生など7団体が、銅板折り鶴製作の体験ワークショップの開催、映像やパネル等による各団体の平和への取組、広く市民等から寄せられた平和へのメッセージの展示など、様々な方法で発表を行いました。



銅板の折り鶴製作体験に取り組む来場者たち

【発表団体】

- ・広島市立広島工業高等学校 平和の板金術師
- ・広島市立広島商業高等学校
- ・ヒロシマ・ヤング・ピース・ビルダーズ
- ・JICA中国

- ・「原爆ドームとヒロシマ」実行委員会
- ・(一財) お好み焼アカデミー
- ・広島サミット県民会議

約400人を数えた来場者は、ステージ発表の鑑賞、展示コーナーでの発表者との交流・情報交換や平和へのメッセージの発信などを行いました。発表時間の終了間際になっても、展示コーナーでは、熱心に発表者の説明に耳を傾ける来場者の姿が見られるなど、発表者と来場者がともに「平和文化」を体験した文化の日となりました。

「ポップカルチャーひろしま2022」に平和文化コーナーを出展【11/5(土)】

アニメ、漫画、コスプレなどの若者文化「ポップカルチャー」の国際交流の場として紙屋町シャレオで行われたイベント「ポップカルチャーひろしま2022」に書道や折り鶴作成を体験できる平和文化コーナーを出展しました。

広島の高中生たちが運営を行い、海外のコスプレイヤーなどのイベント参加者だけでなく、市内中心部を訪れる多くの方が、書道での平和のメッセージ作成や折り鶴作成を体験しました。

平和文化コーナーで寄せられた平和のメッセージは、高校生たちが「Words for Peace」という作品に仕上げ、11月20日(日)に広島国際会議場で開催された「国際フェスタ2022」のメイン会場入り口付近に折り鶴とともに展示し、たくさんの来場者に平和への思いを届けることができました。



平和のメッセージ「Words for Peace」

みんなで伝え合おう ヒロシマ・ナガサキ【11/12(土)】

被爆者の方の高齢化が進む中、様々な世代が被爆体験をつないでいくことが大切であるとの思いから、日頃から広島で被爆体験記朗読の活動などを行っている様々な団体の有志が集い、被爆者の思いを伝える「みんなで伝え合おうヒロシマ・ナガサキ ～広島の会2022～」が本財団との共催の下、開催されました。

会場では、被爆体験記や原爆詩の朗読、平和をテーマに県内の中学生や高校



県内高校生による朗読「松重美人さんの体験記」

生が制作した映像の上映、楽曲の演奏などが行われました。

およそ200人の来場とともに、オンライン配信でも約700人が視聴し、来場者からは、「高校生など幅広い年齢層の方々の発表を聴くことができてよかった」「多様な表現の発表を見ることができ、改めて平和を考える貴重な機会となった」などの感想が寄せられました。ヒロシマ・ナガサキの被爆者の思いを共有し、平和への思いを新たにすることができました。

平和文化賞の受賞者が決定

平和文化月間の取組の1つとして、広島市教育委員会が毎年実施している「青少年からのメッセージ」への応募作品のうち、日常生活の中で「平和」を願う気持ちが強く感じられる4作品を「平和文化賞」として表彰しました。

「大人になるということ」をテーマに、理想とする大人の姿や自分がどのような行動をするべきかなどを作文や漫画・イラストで表現するものであり、どの作品も未来の平和につながる「平和文化」に相応しいものでした。作品については、本財団ホームページ(<https://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/pcfpd/PCMcommendation2022.pdf>)を御覧ください。

作文部門 小学生の部

広島市立志屋小学校六年 佐伯 萌桃
「広い心から笑顔へ」

作文部門 中学生の部

広島市立瀬野川中学校一年 池田 遥人
「『思いやりの心』を大切に」

作文部門 高校生・一般の部

広島県立広島皆実高等学校三年 伊藤 そら
「責任ある行動」



「私が思う大人」

漫画・イラスト部門

広島市立牛田小学校
五年 糸原 凜
「私が思う大人」



平和文化賞 PDF

(平和市民連帯課)

国際フェスタ 2022

～ひらこう世界のとびら であおう世界のなかま～

昨年11月20日（日）、広島国際会議場、平和大通り緑地帯などを会場に開催しました。ここ2年はコロナウィルス感染症の影響でオンライン中心の縮小開催でしたが、万全な感染症対策を施し、2年ぶりに通常開催しました。

広島市や近郊で国際交流、国際協力活動をしている67の市民団体や企業団体が、異文化理解や地球環境、多文化共生、日本文化体験など49の多彩な事業を催し、約1,800人の来場があり、参加した外国人も日本人も、世界各国の文化に触れる一日となりました。（主催－本財団／共催－独立行政法人国際協力機構中国センター、広島市）

オープニングセレモニーでは、安田女子大学文学部書道学科の学生による書道パフォーマンスが披露され、国際フェスタのキャッチコピー「ひらこう世界のとびら」を、ダイナミックに書き上げ、見学者から大きな拍手が起こりました。



安田女子大学文学部書道学科の書道パフォーマンス

巻誠一郎さんトークショー

～世界に羽ばたき、地元と生きる～ スポーツを通じて輝く私

ゲストスピーカーに、元サッカー日本代表の巻誠一郎（まきせいいちろう）さんを迎え、元サッカー日本代表監督イビチャ・オシム氏との思い出やロシア、中国でプレーした際に感じたこと、現在取り組んでいる障がい者支援活動や被災地での復興支援活動などを紹介し、約90人の来場者は、最後まで熱心に耳を傾けていました。



巻誠一郎さんトークショー

国際交流・協力活動の紹介、相談コーナー

市民団体等活動紹介コーナーでは10団体が活動の紹介ブースを設け、それぞれの国際交流・協力活動について紹介しました。このほかにも、公的団体や市民団体、NGO、大学生、企業などがブースを設け、参加者は興味のあるブースを回り、交流を深めていました。

今年は、ビザ・在留資格や出入国・在留手続等に関する相談コーナーを設置し、各種窓口を一元的に紹介するとともに相談にも応じました。

外国文化・日本文化の紹介と体験

外国文化の体験では、中国の切り絵体験、中国結び（中国式組み紐）体験コーナーを催し、日本伝統文化の体験では、着物の着付け、茶道、いけばな、書道などのコーナーを催しました。外国人も日本人も、各国に伝わる文化を興味深く体験していました。

世界の料理と民芸品バザー

国際会議場南側の平和大通り緑地帯では、「ひろしま国際村 世界の屋台」と称し、12団体が世界の様々な料理を販売しました。また、「国際協力バザー」会場には10団体が参加し、各国の民芸品などを販売しました。

このほか、留学生の発表会、大人から子どもまで異文化体験を楽しめる「地球ひろば」、広島市の姉妹・友好都市について学べるコーナー、世界の舞踏や音楽を披露する屋外ステージ、イベント会場を回ってクイズに答えるとプレゼントがもらえるクイズラリーなど、各会場は大いに賑わい、参加者は、多文化共生、国際交流・協力について、理解を深めていました。

（国際市民交流課）

北海道3都市で国内原爆・平和展を開催

広島平和記念資料館では、原爆被害の実相を伝え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けた世論の醸成を図ることを目的として、平成8年度（1996年度）から国内各地の都市で原爆・平和展を開催しています。

本年度は、北海道3都市（苫小牧市、札幌市、旭川市）において開催し、原爆で犠牲になった方の遺品等の被爆資料、被爆の実相と核兵器の現状を伝える写真パネル、高校生と被爆体験証言者が共同で描いた原爆の絵などを展示しました。また、展示の開催に併せ、本財団被爆体験証言者である八幡照子（やばたてるこ）さんを苫小牧市に、笠岡貞江（かさおかさだえ）さんを旭川市に派遣し、自身の被爆体験



被爆体験講話の様子（旭川市）

を語っていただきました。

来場者の方からいただいた感想の一部をご紹介します。(原文のまま)

・みんなにもこの話をつたえたいと思いました。

(10歳未満)

・せんそうを今やっている「ロシア」「ウクライナ」が早く戦争をやめて全世界が平和な国になってほしいなと感じました。(10歳未満)

・原爆が広島・長崎に落ちたことは「出来事」として知っていたけど、今回の講話を聞いて、日本に暮らしている私にとっても身近なことなんだと感じた。

(13～15歳代)

・道内に住んでいると見ることでできない貴重な資料を子どもに見せることができ、とてもよい機会になりました。(50歳代)

・辛い記憶を語って下さった証言者の想いを忘れないようにしたい。(60歳代)

実施の概要

【苫小牧市】

期間：7月30日（土）～8月21日（日）（23日間）

場所：苫小牧市文化交流センター（アイビー・プラザ）

来場者数：約3,700人

【札幌市】

期間：8月5日（金）～8月15日（月）（11日間）

場所：札幌駅前通地下歩行空間

北1条イベントスペース東

来場者数：約26,500人

【旭川市】

期間：11月30日（水）～12月11日（日）（12日間）

場所：旭川市民ギャラリー

来場者数：約800人

(平和記念資料館 啓発課)

ポーランドにおけるヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展の開催

広く被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けた国際世論を醸成するため、広島市と長崎市は共同で、平成7年（1995年）から海外において「ヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展」を開催しており、今年度はポーランドで初めて開催しました。会場は、グダンスク市にあるグダンスク第二次世界大戦博物館です。

同館は、第二次世界大戦勃発の地として知られるグダンスク市に2017年3月に開館し、常設展示は「戦争への道」、「戦争の恐怖」、「戦争の長い影」と題する三つのブロックから構成されており、ヨーロッパと世界を背景にしたポーランドの戦争体験を展示しています。

展示会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、当初の予定より約2か月延期され、現地時間の2022年10月14日から開催されました。同日行われた開



展示会場の様子

会式では、グダンスク第二次世界大戦博物館のグジェゴシュ・ベレント館長、在ポーランド日本大使館の宮島昭夫特命全権大使、広島平和記念資料館の滝川卓男館長らが挨拶を行いました。その後、被爆体験証言者の梶本淑子さんが地図や絵などで構成されたスライド資料を使用して証言を行った録画を会場で流しました。出席者は証言に聴き入り、中には目に涙を浮かべている人もいました。

展示内容は、動員学徒として作業中に被爆し、犠牲となった中学生が原爆投下時身に付けていた腕章を始め、中身が黒焦げになった弁当箱の複製、オバマ元米国大統領の折り鶴など、実物資料20点のほか、広島・長崎の被爆の実相を説明したパネル31点などです。

展示を見学した来場者は、「核兵器の脅威を実感することができた」「ロシアによる核兵器使用の懸念がある中、自分事として考えるきっかけとなった」などの感想を述べていました。

また、グダンスク第二次世界大戦博物館での開会式に先立ち、10月11日から13日まで同館で開催された世界各国の博物館関係者が集う「世界戦場博物館フォーラム2022」に滝川館長が出席し、被爆体験の継承や原爆・平和展等の当館の取組について発表しました。発表後、各国の複数の博物館関係者から原爆・平和展を開催したいとの声が寄せられました。

展示会は、当初の予定を変更しての開催となりましたが、激戦が続くウクライナの隣国ポーランドにおいて、被爆資料の見学や被爆体験の聴講などを通して、核兵器が使用されれば、どのような結末になるのかを理解し、核兵器廃絶や平和の尊さへの思いを深めていただくことができました。

(平和記念資料館 啓発課)

平和記念公園を英語でガイドするユースピースボランティアの活動

本財団では、次代を担う広島の青少年が平和の大切さを学ぶとともに、ヒロシマの心を国内外に伝える機会を創出するため、平和記念公園を訪れる外国人に被爆の実相を英語で伝えるボランティアガイドを育成し、

その活動を支援する「ユースピースボランティア事業」を令和元年度（2019年度）から実施しています。

今年度は、高校生27名、大学生22名の合計49名が活動しています。

ガイド活動に向けた事前研修

ガイド活動に先立ち、5月から7月にかけて、平和学習講座や被爆体験講話の聴講、ヒロシマ ピース ボランティアによる平和記念公園ガイドの受講など、3回の研修を通して、被爆の実相についての理解を深めるとともに、平和記念公園を英語でガイドするために必要な知識や心構えについて学びました。

受講したユースピースボランティアからは「学んだことを自分たちの言葉でしっかりと伝えていきたい」「相手に伝わるようなガイドを心掛けたい」などの声が聞かれ、それぞれが目指すボランティアガイドに向けて、意欲を高めました。

平和記念公園でのガイド活動

8月から月1回のガイド活動を行っており、今年2月までの7回の活動を通して、米国、オーストラリア、イギリスなど21か国・地域の156人の観光客の方々を案内しました。

ガイド活動を行ったユースピースボランティアは、「外国人観光客との会話の中で、原爆や平和への考え方を聴くことができてよかった」「原稿を読み上げるだけではなく、内容を覚えて自分の言葉で伝える必要があると思った」「移動中も積極的に話しかけて、コミュニケーションを取りたい」など、活動を振り返る中で、研修やこれまで積み上げてきたガイド活動の成果を実感した一方、今後に向けた課題も発見したようでした。また、ガイドを受けた外国人からは、「説明してくれたお陰で理解が深まり、改めてヒロシマについて考えるきっかけとなった」「若い世代が被爆の実相を伝えていく取組は非常に有意義だ」などの評価をいただきました。

ユースピースボランティアは、これまでの活動を通じ被爆者の思いをしっかりと受け継いだ上で、自分の考えを英語で相手に伝える楽しさと難しさの両方を実感し、さらに努力していきたいとの決意を新たにしました。（平和市民連帯課）



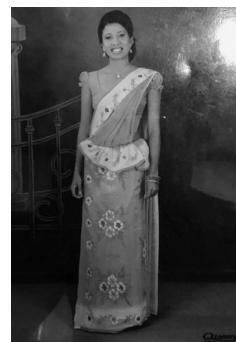
ガイド活動を行うユースピースボランティア

～ウチも、ワシも～ 広島市民じゃけえ！

デーウィカー・ウィーラシンハさん

スリランカから来ました。デーウィカー・ウィーラシンハと言います。「ආයුබෝවන්」アーユ ボーワン。」

スリランカでは「こんにちは」「ありがとう」「さようなら」など、様々な場面の挨拶に「アーユ ボーワン」と言います。これはもともと「長生きしてください」という意味です。相手への思いやりが込められた言葉で、大好きな言葉です。



私が初めて日本に来た2008年、滞在先のホストファミリーから オサリー姿のデーウィカーさん たまたま街で出会った方まで、

いろんな方に親切にいただいたことが心に残っています。見知らぬ人も、道や慣れない日本語の表示を親切に教えてくれ、レストランではメニューの読み方を教えてくれた人が親切心から私の分までこっそり会計を済ませていてくれたことに驚かされました。また、日本では礼儀正しくマナーを守る人も多い上、治安が良く、夜に出かける場合でも大きな心配はありません。そんな日本での経験がきっかけで再度来日し、現在は安田女子大学大学院の研究生として日本語教育に関する学位取得を目指しています。

スリランカは「インド洋の真珠」と呼ばれる、インドのすぐ南に位置する島国です。独自のシンハラ語という言葉を持ち、7割以上の人が仏教を信じ、仏教系の遺跡もたくさんあるなど、独自の文化があります。（注：英語、タミル語等も使われています。）

文化遺産では、仏陀の犬歯を祀っていることで知られる「仏歯寺」など、有名で美しい仏教寺院が数多くあります。また、自然も魅力的で、10もの国立公園があって、野生動物を見に来る海外観光客も多いです。日常生活でも、茂みや山に近いところでは、サルはもちろん、時には野生の象と出くわすこともありますよ。

スパイスを使った料理など、食文化はインドと似ているものもありますが、スリランカの主食のひとつ、インディアーツパは独特だと思います。米粉を練った生地をパスタの様に麺状に押し出しながら、麺で皿のような形や塊を作ります。それを蒸して、カレー等と一緒に食べるのです。日本ではなかなか食べられる店がありませんが、いつか日本の人に紹介したい味です。スリランカの伝統衣装はオサリーと言います。日本の方もよく耳にされてご存知のインドのサリーと似ていますが、お腹から左側に向かって腰にひだができるのが特徴です。官公庁や学校で働く女性の多くは、毎日これを着用しています。

真珠の様に光り輝く島、スリランカに、皆さまいつかは是非遊びに来てくださいね。